

蜘蛛の巣と悪夢

牧師 山本 護

秋が深まり、蜘蛛や蠅螂といった肉食昆虫が産卵のためにでっぴり太って、寒さの中じっと動かない。蜘蛛の巣の一端は十字架に、そして隣のリョウブの木と足許の石に糸を結んでいます。粘り気のなくなった古い網ではもう獵ができまい。田舎の町で、ひと気のない商店を覗くと棚に埃をかぶったカップえびせんが、みたいな抒情を感じます。



詩人・石原武(1930-2018)の「オクラホマの〈夢捕り〉」は、北米先住民の子供たちの寢床に吊るす、まじない用具「夢捕り／ドリームキャッチャー」を軸にした後期作品。「いい夢は蜘蛛の巣と仲良しだから／そこを通り抜けて／眠りの中へそっと滑り込むんだって／悪い夢は蜘蛛の巣の敵／捕えられて夜明けの光に消えちゃうっていうの」。ドリームキャッチャーは「鳥の羽毛がひらひらする輪を顔の前にかざした／輪には蜘蛛の巣が銀の糸で編まれている」という形態らしい。

「飢えた者が夢を見た。見よ、彼は食べていた。だが目覚めてみると、彼は空腹のままであった。渴いた者が夢を見た。見よ、彼は飲んでいて。だが目覚めてみると、疲れ果てて渴いたままだ(イザヤ29:8)」。

空腹を満たし、喉の渇きを潤してくれる夢。これははたして、切に願うことの良い夢なのか。それとも、目覚めた時の現実をいっそう過酷にする悪夢なののでしょうか。ドリームキャッチャー自身が眠るその人に応じて良夢か悪夢を判断するとしたら、私たちの寢床で蜘蛛の巣はさぞや困惑することでしょう。人の願望と未知の可能性は一致しないのが常ですから。十字架の許で粘り気のなくなった古い蜘蛛の巣を眺めていて、ああこれでは悪夢が捕えられないな。夢はまた別の現実だし、まあ、それならそれでいいか。

英文学者としてマイノリティ詩の紹介に熱心だった石原武氏。氏から生前「この本は君が持っている方が…」と「The Indians Book」という分厚い書物を手渡された。各部族の言語や慣習、踊りや子守歌などが蒐集されたもので、ずっしりした重さに北米先住民への愛を感じました。「悪い夢は蜘蛛の巣の敵／捕えられて夜明けの光に消えちゃうっていうの」。人間の罪も悪夢のように、召されると夜明けの光に消えてしまうのでしょうか。Ω